
声

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声

【Nコード】

N9356L

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

あやしげな内容ですが、別にあやしい内容ではありません。

声が聞こえた。どこからともなく響き渡ってきたのであって、内側の声というわけではない。内側ということであれば病氣という心配が湧き出るので不安だが、紛れもなく外側からの音であったから、私は耳を澄ました。耳に手をこしらえて聞かなければ聞こえないような、わずかな、ささやきに近いそれだったから、聞き取れるのか不安ではあった。だけれども、やがて聞こえてきた。その時に、私は確かな安堵を感じたのをやけに覚えている。それは遠い昔の声であり、それでいて目の前にずっと佇んでいたかのような、圧倒的な抱擁感がかね揃えている声だったのである。私は感激を身に潜ませながら、しつとりと、その囁きを耳に入れ込んでいった。やがて聞こえて来なくなる時まで、私は永遠にそれを聞いていて、身動きをしなかった。身体をわずかでも反らすことは、抱擁されている間は許されないことだと、本能的に理解出来たような錯覚に陥っていた。私は、何かに取り憑かれた哀れな小市民であるかのように、身を硬直させていて、指先でさえも動かすことを憚った。そして、呼吸だけは絶やさなかったのである。

「……」

私は呼吸をすることしか許されてはいないわけだから、声に対し返事をするには許されていないのである。だから、私は石像でなければならぬ。決して、この時に限っての話なのだが、生物を止めることが義務に等しい。そういった決心の元で、私は呼吸をさえ遠慮した。酸欠にならないよう、そうなっては元も子も無いので、定期的かつ少量の呼吸をだけして、声に身をヤツしていた。その内、声は元々が囁き程度の微々たる音量だったにも関わらず、さらに小さくなった。私の内側で悲しみが広がった。涙さえも浮かびそうでもあった。しかし、涙を流すことだけは許されなかった。涙を頬から地に垂れ流すということは、声に対する冒瀆のような気さえ私に

はあつたのである。おそらく勘違いではあつたが、しかしそういつた些細な事さえも忘れる程に、声に対する私の内側から溢れ出る感動というものは、凄まじいそれだったのである。

だが、やがて声は遠くに飛んでいつてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9356/>

声

2010年10月10日05時44分発行